

解説 赤穂義士の吉良邸討ち入りを記した詩。

赤穂義士事録（頼 山陽）

元禄 壬午 十二月

維 十四日 夜 大いに 雪ふる

雪を 排する 四十六条の 鉄

仇家の 門を 研つて 門関 折る

白雪は 化して 模糊の 血と 為る

血戦 何ぞ 覚えんや 手鞆 裂するを

唯 恐る 隣竝の 草竊と 認むるを

使を 遣わし 辞を 致して 唐突を 謝す

隣 方に 客を 会して 燭跋を 見る

敢えて 為さんや 纓冠と 披髪とを

客は 使者と 素より 交結

出でて 観れば 快剣 虎穴を 抉る

凍月 空に 在り 光下 徹す

劍華 雪に 和して 眼 纈らんと 欲す

語釈 ※元禄Ⅱ江戸時代の  
一六八八年から一七〇四年まで。

※壬午Ⅱ「みずのえうま」とも呼  
ばれ干支の組み合わせの一九番目。

※仇家Ⅱかたきの家。※模糊Ⅱはっ  
きりしないさま。※手鞆裂Ⅱ皮膚

の弾力性が衰えたため、表皮が裂  
けてできた割れ目。あかぎれ。

※隣竝Ⅱ並んでいる隣家。※草竊  
Ⅱ恩返ししたという故事から、恩

に報いる。※唐突Ⅱ突然。不意。  
※燭跋Ⅱ灯火の燃え止し。※纓冠Ⅱ

冠の紐。※披髪Ⅱ髪を結ばず振  
り乱したさま。※交結Ⅱ親しい交

際を結ぶこと。※虎穴Ⅱ極めて危  
険な場所や状況のことを意味する。

※凍月Ⅱ凍える様な月。※眼纈Ⅱ  
目がかすむ。かすみめ。

通釈 元禄壬午十二月十四日の夜

は大雪が降った。その雪を排して吉  
良邸の門を切り離れた。白雪は血

で染まるであろう。死を賭しての  
戦いを前に手の鞆は裂けた。この

討ち入りで恐れたのは隣家に対し  
て申し訳ない気があり、事情を述

べて唐突な討ち入りを謝したとこ  
ろ、灯火を消し、黙殺すること。

隣家と使者はすでに交結していた  
事が幸いした。主君の仇討ちは見事

成し遂げ。天を仰ぐと凍える様な月  
の光が貫き通り、そして、劍の輝

きが雪と和み眼が霞んでならない。